2023年3月26日　朝 礼 拝 順 序 (午 前 10 時 半)　(№13)

司式　杉山昌樹牧師

前　奏　奏楽　豊島慶子姉

開 会 招 詞　詩編100編1－5節

＊ 賛 美 歌　3:1（ソングシート）

1. ちからの主を　ほめたたえまつれ　わがこころよ、今しも目さめて、
たてごと　かきならしつつ　御名をほめまつれ。　アーメン

＊ 開 会 祈 祷

罪 の 告 白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　戒　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊ 賛 美 歌　３：２（ソングシート）

2. すくいの主を　ほめたたえまつれ　みことばもて　わが身をはげまし、
なやみに　かたしめたもう　みいつたぐいなし。アーメン

公 同 の 祈 祷　7　キリストの二性一人格

三位一体の第二位格である神の御子は、まことの永遠の神であり、み父と同質・同等でありながら、時満ちて、人間の性質を、それに属するすべての固有の性質や共通の弱さと共にとられ、しか

も罪はなかった。彼は、聖霊の力により、処女マリアの胎に彼女の本質をとって身ごもられた。
そこで、二つの十全で区別された性質、すなわち、神性と人性とが、変換・合成・混合することなく、一つの人格の中に、分離できないように結合されている。この人格は、まことの神またまことの人であり、しかも一人のキリスト、神と人との間の唯一の仲保者である。アーメン。(ウエストミンスター信仰告白8章2節によるカルケドン信条：451年)

献　　金　　（黒）教会活動（赤）メディアミニストリー　　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

子ども礼拝

聖　書　朗　読　　エゼキエル37章11－14節（旧約聖書1357頁）

ヨハネ11章38－44節（新約聖書190頁）

説　教・祈　祷　「起き上がる力」杉山昌樹牧師

＊ 賛　美　歌　４７:１，４

1. 1. 主よ、われをば　とらえたまえ、さらばわが霊は　解き放たれん。わがやいばを　くだきたまえ、さらばわが仇に　打勝つをえん。

4. わがすべては　主のものなり、主はわが喜び、また幸なり、主よ、みたまを　満たしたまえ、さらば永遠の　安きを受けん。アーメン

＊ 主　の　祈　り　　祈祷書1

天にます我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊ 頌　　栄　　６３

あめつちこぞりて　かしこみたたえよ、みめぐみあふるる　父、み子、みたまを。アーメン

＊ 祝　　祷

後　　奏　　(黙祷)

報　　告 司会古澤純一長老・受付門脇陽子長老（次週：雨宮信・古澤純一長老）

本日　受付　１階：大日南信也・藤井牧子執事　２階：大日南隆夫執事　／ZOOMホスト・録音：森川莞太

次週　受付　１階：古澤迪子・森永美保執事　２階：加藤良明執事　／ZOOMホスト・録音：門脇光生

ヨハネ11：38－44　「起き上がる力」

病気とその後

今日の所もまた、11章の始めから続く長い話の最後にあたるクライマックスの個所です。ただ一度限りの出来事、それもイエス様がエルサレムに入る直前に行われた、七つ目の奇跡の様子が描かれています。そこで問題は、なぜこのような奇跡が行われ、記録されているのかです。もちろん、目的があります。先ほどは読みませんでしたけれども、4節には、このラザロの病気そのものが、ただそれだけで終わるものではないとあります。書かれた通りにお読みしますと「この病気は死で終わるものではない」むしろ「神の栄光のためである」となっています。これは、先週一緒に読みました、9章で盲人が生まれつきそうであるのは神様の業が現れるためだとイエス様が言われたこととよく似ています。そこで神様が働かれ、そして、私たちを苦しめる死に対して、神様の力が表される、このことにつながっていくためだ、ということが最初に書いてあります。

呼び出しにもかかわらず

最初ということでは、そもそも、1－3節で、ベタニアという村に住んでいたマリアとマルタ、そしてラザロという兄弟姉妹たちのことが紹介されています。ある時ラザロは病気になりました。そして、その知らせは使いによって、イエス様に伝えられました。ところが、イエス様は先ほどのように、「神様の栄光のため」ということを使いに来た人に言いまして、あえて、そこにとどまっておられたのでした。もちろん、そこにとどまるにはそれなりの理由もありました。10章を見ますと、イエス様はユダヤ人たちによってとらえられる寸前まで行きました。それでわざわざヨルダン川の向こう岸まで逃れてきたのですから、再びエルサレムとその周辺に近付くのはかなり危ない行為です。しかし、結果としてこの後、イエス様は、弟子たちと共に決意を固めて、エルサレムのそばのベタニア村へと出かけることになります。しかし、その出発までに謎の二日間がありました。その間に恐らくラザロは亡くなってしまったのです。そしてイエス様ははっきりとそのことを意識されてました。14節を見ますと「ラザロは死んだのだ」と言われています。ところが、それに続く、15節では「私がその場に居合わせなかったのは、あなた方にとって良かった」と言われています。この少し後を見ますと、ラザロの姉弟であるマルタが、なぜもっと早く来てくれなかったのか、とイエス様に恨み言を言う場面があります（11：21）。確かに、イエス様がラザロが生きている間に到着したなら彼を癒すことができたでしょう。しかし、そうはしなかったのです。しかも、その方がよかった、特に弟子たちにとって良かった、というのです。

弟子のため、群衆のため

このような言葉を聞きますと意外な感じがします。イエス様ちょっと冷たいんじゃないの、と言いたくなります。しかし、そこで、なお語られている言葉があります。それは弟子たちにとって良かったというその理由です。15節の続きはこうなっています。「あなた方が信じるようになるためである」。ここでは、弟子たちの信仰、イエス様に対する理解が問われています。そして彼らがイエス様を正しく信じることができるために、この一連のことがあるのだ、このように言うのです。そして、同じことは、実は、42節でイエス様が墓の前で祈る言葉の中にも出てきます。イエス様が天に向かって祈っている、それは、イエス様の願いが聞かれるためではない、ということがまず言われています。そうではなく、そこでもまたラザロの死に際して祈るこの祈りが「周りにいる群衆のためです」とはっきりと言っておられます。しかも「あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるため」と言われています。やはりここでも「信じるため」それもイエス様が何者かを信じるため、なのです。まさに、このラザロの死と向き合っているすべての人たち、群衆も弟子たちも含めて、あるいは、私たちも含めて、すべての人が、この出来事を通して、イエス様が神様によって遣わされて地上で業をなしておられることを信じられるように、これがこの出来事の目的だと言われているのです。そうであれば問題なのは、何といっても、私たちがイエス様をどのように信じるのかなのです。

墓墓前の出来事

ところで少し話が変わりますが、今度のイースターは墓前礼拝を午後に行います。晴れていれば、五つの教会から集まった方たちと共にお墓の前で礼拝をささげることになります。それで、現代のお墓は、墓石の前に四角い分厚い板のような石がありまして、それをずらすと、中に骨壺が納められるようになっています。そして、全く当たり前ですが、そのような骨壺の中には骨、ないしかつて骨であった破片やちりがあります。例えばそのような骨に、いきなり神さまの力が働いて、先ほど読みました、エゼキエル書のように、骨と骨がカタカタと集まってくっつき、それに筋や肉が盛り上がって、やがて皮膚で覆われ、さらに霊が注がれて、生きた人となって墓から出てくるということは、実際にはありません。私たちは、この時代に奇跡が起きることを、当てにしていません。そのうえで、わたしたちは、このラザロの出来事をどのように受け止められるのか、真剣に考えざるを得ません。この時、墓の中にいたラザロは、すでに死んで四日過ぎていました。マルタが、「主よ、四日も立っていますからもうにおいます」（39節）と言っているとおりです。すでに肉体としては、腐敗も進んでしまっている、そのようなラザロの前にイエス様が立たれた、それがこのところの中心的な出来事です。死んだ人の前にイエス様が立っておられるのです。そしてそのイエス様は、神様から遣わされた方です。いわば神様の力がこの墓の前に、あるいは墓の中に届いているのです。そして、まさにその限りで、神様の力が働いているという事実によって、ただ一度きりの出来事が、確かに起きた、というのがこのところです。あえて言いますと、このようなことは繰り返し起こることではありません。むしろ、ただ一度のことです。しかし一方で、このただ一度の出来事が、この時確かに起きたということを否定する証拠もないのです。それゆえ、このただ一度のこと、人間のよみがえりのこの出来事、それをどう受け止めるのかが、今この記事を読む私たちに神様から問われるのです。

イエスの憤り

それで話を少し戻しまして、今日の聖書の最初の38節の始まり方はこうでした。「イエスは、再び心に憤りを覚えて」。再びですから、その前もありまして、33節では、マリアが姉のマルタと同じように、イエスにもっと早く来てくれていれば、と恨み言を言い、泣き始め、周りの人たちも、つられて泣き出した、というところでやはり「心に憤りを覚えて」書いてあります。その後を見ますと、イエス様もまた、涙を流された、とあって、ラザロの死を悼んでおられるのですが、しかし、この所でのイエス様の憤りは、おそらく、このような死の力に対するものです。死の力は、あまりにも当然のように、私たちの心を支配しています。少々自虐的な言い方として、人間は誰でも死亡率百パーセントだ、と言ったりします。確かに、この肉体は誰であれいずれ滅びるという意味では全くその通りです。私たちは、誰でもやがて死に至ります。しかし、そこで、マルタやマリアのように、少しでも地上の命が長らえるのなら、と言い、死んでしまった今となっては仕方がないと言って嘆き悲しむ以外のことができないでいる、この事実に対して、イエス様は、憤られたのです。なぜでしょうか、家族の死を前にして嘆かない人はいません。それをとがめる権利は誰にもないはずです。しかし、イエス様は、あえて、この時、死の力に憤って挑んでおられるのです。それが墓と向き合うこと、そして、「石を取り除けなさい」という一言になってほとばしっているのです。

神を信じる

これに対してマルタは、先ほども確認しましたように、「においます」と言って、肉体を襲った死の力の引き起こすおぞましい結果の方を信じています。それに対して、イエス様は、「もし、信じるなら、神の栄光がみられると言っておいたではないか」と答えています。ここではっきりしているのは、一体何を信じるのかです。神様の力を信じるのか、命を奪う死の力を信じるのか、です。イエス様が憤って、戦いを挑んだのは、この死の力です。そして、その勝負は実はすでについている、というのがこのところの結論です。すなわち、イエス様が墓の前に立って祈った時に、この勝負は決しているのです。なぜなら、イエス様はこのように祈っているからです。「父よわたしの願いを聞き入れてくださって感謝します」。「父よ、わたしの願いを聞いてください」ではないのです。すでに聞かれているのです。ラザロを死の世界から引き戻し、さらに新しい命に生きるようにする、そのことは、すでに聞かれている、というのです。イエス様が地上で行動しているその所に神様の力が働いていて、そこにすでに神

様の栄光が現れているのです。

開放が来る

　そして、イエス様のこの一連の行動の目的は、すでにお話ししました通り、見ている人たちが、イエス様がどこから来たのかを信じさせるため、でした。イエス様の行動、それは神様の御心をなすことです。その一つの象徴が、このところの一連の出来事です。そのような出来事には、ラザロが実際に墓から出てきて、世界に向けて解放されているところまでが含まれます。ここでは、開かれた墓に向かってイエス様が「ラザロ、出てきなさい」と大きな声で呼びかけ、その通りに、ラザロが体に埋葬用の布でぐるぐる巻きにされたまま、墓から出てくる様子が描かれています。それは、ある凄みを感じさせる出来事です。何しろミイラのようなものが、のそのそ、墓から出てくるわけですから。しかし、そのような死の衣をほどいて、自由にせよと、イエス様は命じておられます。そして、このことはまた、イエス様が何をされるのか、ということを象徴的に現わしているように見えます。すなわち、イエス様は、出会った人、呼びかける人を、死の支配から自由にして、新たな命に生きるようにされるのです。

信じる

　そしてこの新しい命は、イエス様と出会って、イエス様を信じるところから始まります。「私は復活であり、命である」と言われる方には、神様の命が働いています。この事を信じる人には、この復活の命が、今すでに、この地上において、与えられます。この時、生き返ったラザロも、マルタもマリアも、また、イエス様を信じた弟子たちも、群衆もみな、いずれ地上の命を閉じたことでしょう。しかし、そこにはすでに、復活である方の命が与えられていました。私たちが今、与えられている復活の命もまた全く同じ命です。

起き上がる力

　有名なイザヤ書の言葉に「主に望みを置く人は新たな力を得、わしのように翼を張ってのぼる」があります。これは何も、体がいつまでも若々しい、ということではないのだと思います。私たちの持つ肉体が衰え、弱気になっていってしまう時も、とても悪い状況に追い詰められて、希望がないかのように思える時でも、あるいはそのようにして私たちが弱り果ててしまっている時にこそ、私たちを生かす力がやってきている、それが信じることによって与えられる命です。私たちは、イエス様によってこの新しい命を与えられています。それゆえ私たちは、いつであっても新たに起き上がる力をいただくのです。

　祈り　父なる神様。あなたは、私たちに命の道を示してくださるばかりでなく、その命の中をあゆむようにと召し出してくださいますから感謝します。どうぞ、この週もまた、あなたのあふれる命と共に、最初から最後まで守られ導かれますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。